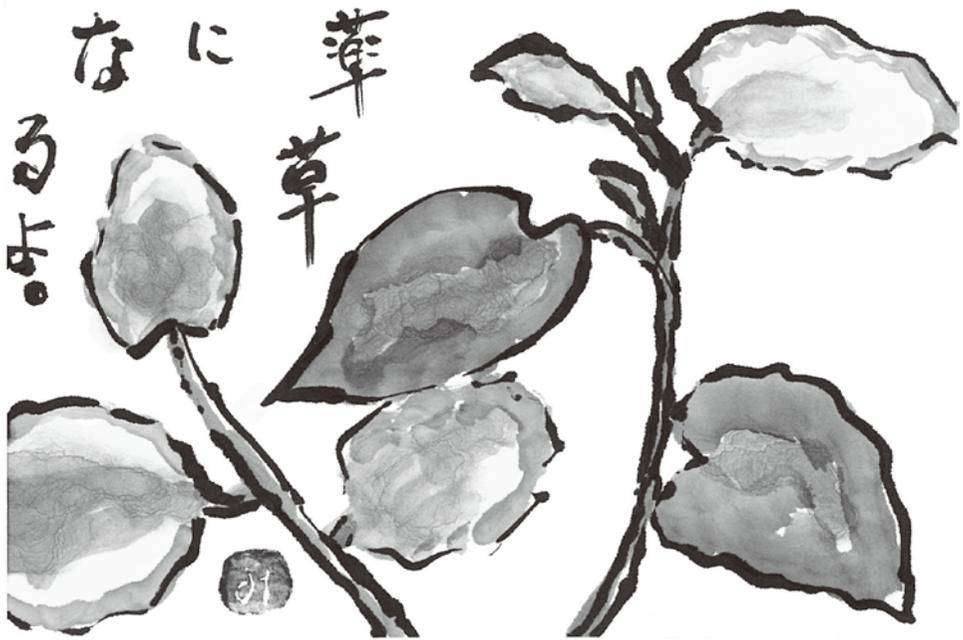


# 短編小説



教室「道草の詩」<sup>うた</sup> 小川 美津子

## 南京の果て

殿台 吉田 満春

満州事変が始まった翌年の昭和七年六月四日、信任状を携えた駐日米大使ジョセフ・グルーは、皇室が遣わした供奉の騎兵隊に囲まれ馬車で宮城に向かった。妻アリスは、慶応義塾大学の英語教師に招かれた父親と三年間の日本滞在を体験している。アリスの父親トーマス・サージェント・ペリーの曾祖父は、日本に開国を迫ったあのペリー提督の兄にあたる。雨はいよいよ激しく、土砂降りとなった。馬車に揺られながら不吉な予感がよぎった。(幸先の良い船出といえるのだろうか)先導する騎馬隊は濡れ、聞こえるのは馬蹄鉄の音と車輪が回る音だけであった。グルーは三一歳の天皇に拝謁し、信任式を終えた。しかし、グルーはわずか半年で離職する運命であった。民主党のルーズベルトが大統領選挙に勝利したこの年の一二月、共和党員のグルーは、辞表を提出していたが、駐日大使に留まる電報を受けたのであった。「これは新政府の決定的任命にひとしく、仕事を継続すべきであることをはっきり知った。われわれは、非常に幸福である」と安堵と喜びを記している。不思議の国、日本の魅力を断ち切ることは心残りであったからだ。

彼は日本の観察者として日本の文化、日本人、宮家の生態にも興味をもつて報告しているが、自身が名門という出自から、上層階級からの情報に偏っていて、それ故、日本が戦争に突き進み、敗北した後も彼等には同情的であったと評価する者もいる。外交官とはいえども好悪が生じるのは止むを得ない。大事なものは普遍的な価値観である。寛容、誠実ともいえるが、人間が生来備えている良心の世界だ。国境を越えて、良心の覚醒を求める者が選ばれなければならないが、現実の政治世界はそうではない。自国の立場を擁護し、国益を主張しなければならない。しかし、希望を持ち続けることに挑戦しなければならない。

日本国内は、軍部出身者を内閣総理大臣に擁立した挙国一致内閣に変わったが、第三〇代総理大臣斎藤実、第三一代岡田啓介が昭和一年の二・二六事件の陸軍クーデターにより殺害されると(岡田は難を逃れて無事)、岡田内閣は総辞職した。軍部に受けが良く制御がききそうな人物として近衛文麿が指名されたが、体良く断わられた。政党はこのような大事件を起こした陸軍を規制できないばかりか、軍部こそ政治を主導すべきとする勢力は強まっていたのである。

グルーは欧米協調派の牧野伸顕の女婿吉田茂を通して、

ベテラン外交官広田と活発に意見交換していた。広田は齋藤、岡田内閣時代にも外務大臣を務め、国際連盟脱退後も国際平和を希求してやまないこと、外務省による外交の一元化を求めたのだった。列国と協調を軸とした日本外交本来の軌道に引き戻す努力が続けられた。

日本の貿易構造は、米国に生糸を輸出し、米国から綿花を得て、綿花を国内で加工し、インドなどの英国植民地、自治領に輸出。輸出で得た外貨で、日本の重化学工業に必要な屑鉄、石油、ゴム、錫すずなどの原料を輸入していた。中国大陸への進出を深めれば、日本の軍備拡張、すなわち生産力拡充のための重工業が必要とする原材料を英国の経済圏に依存し、また外貨を獲得するために米国との貿易がますます重要となる。満州を維持するために、緩衝地帯として華北に進出したい軍部と、外貨を得るためには欧米との協調を主張する広田の二面外交は、グルーの目からは破綻が見えていたのである。

軍部が政治を主導し、外交にも意見する困難な時代に外相であった広田弘毅に組閣の大命が降りた。広田が組閣を決断したのは謎だが、案の定というべきか広田内閣は、陸軍大臣の衆議院解散要求に、わずか三三一日の在職期間で終わった。次の内閣は陸軍大将の林銑十郎であったが、すぐに辞職。昭和一二年六月四日、第一次近衛

内閣が始まった。広田は再び外務大臣に迎えられた。

昭和一二年四月一八日、グルーは、ヘレン・ケラー女史を大使館公邸に招待していた。盲ろう者であるヘレンに、日本各地を訪れた際に、市民の生の声を聞いてもらいたいという依頼を託すつもりであった。グルーの情報源は、身分上、穩健的層からの情報が多く、日本国民の声は新聞紙上からしか知りえない。とりわけ国民が天皇をどのように見ているかは外交官と知りたいたい事項であった。

見えないはずの目は、慈愛で溢れる輝きに満ちていた。アリスはヘレンの知的で温和な表情を注視していた。四月一五日、ヘレンは秘書のメアリー・トンブソン嬢とともに横浜港に到着、翌日、新宿御苑の観桜会に出席した。ヘレンは、天皇に拝謁した。一七日はアメリカ大使館の呼びかけで、日本の高官が出席、ヘレンの活動を紹介し業績を讃えた。ヘレンから日本の国民が抱く天皇感を直接聞くことは、何らかのヒントを得ると考えている。

「日本の特高（特別高等警察）の目があるので注意するように」とも付け加えた。

ヘレンは、訪問の目的であった埴保己一を顕彰する社団法人温故学会に来会したのは、四月二六日であった。翌日には大阪、埼玉と訪問し、七月半ばまで旅は続けられ、八月一〇日、横浜港より秩父丸に乗船して日本を去

った。日本の記念として、特に秋田犬を所望した仔犬も同船していた。

ヘレンがまだ旅を続けていた七月七日、北京西方の石造りの「マルコポーロの橋」と呼ばれた盧溝橋で日中が武力衝突した。一日、現地の交渉で、中国側は日本側の要求を受け入れ現地協定が調印されたが、これが日中全面戦争に発展した。国内ではいわゆる皇道派と呼ばれる対ソ武力派と、一撃でシナを追い込むという統制派が反目していたが、二・二六事件で皇軍派が掃き払い、統制派がシナ問題に関与すると、武力による解決に舵を切った。陸軍、政府も最初は不拡大であったが、上海戦が始まると南京攻略、占領まで行けるといふ声は、停戦講和という広田の判断を狂わせたのである。

一方中国は、日本軍部の混乱に乗じて日本と妥協するのではなく、対決する方向に動いていた。毛沢東の共産党はコミンテルンの指示を受け反日活動を強め、日本に協力的及び平和交渉を叫ぶ者も敵とみなし、殺害事件が頻繁に起こった。国民政府の蒋介石は毛沢東の共産軍と手を結び、二二五万人の将と兵からなる一九八師団を擁し、近代兵器を備え兵の訓練を外国武官が担っていた。日本は平時体制の三〇万人の一七師団しかなく、中国を侮っていたのである。

グルーは日記に「対外関係に関する限り、一九三七年は日本にとってよくない年である。(中略) 国際連盟から脱退したことによって始められた日本の孤立を、完全なものにした」と書いた。この年こそ日本の運命を決定した時期であったといえるであろう。

アリスはグルーが憂鬱になると、特徴的なサインを表すのを知っている。首を片方に傾ける仕草が多くなるのだ。幼少時にかかったであろう熱のため、片耳が難聴になった。外交官になるにはハンデとなったが、補う方法として表情と唇(読唇術)で確認したのである。しかし、困難な交渉をする際は、聞こえる片方の耳も時として機能しなくなるのだった。

「ワシントンは何が変わったようだ」

グルーがアリスに呟いた。

「変わった？」

「上海には共同租界がある。中国が上海に日本軍を誘い、紛争を拡大させれば日本は孤立し、さらに資源が枯渇するだろう。大統領は戦争を望んでいるのかもしれない」

大国となった日本を世界から締め出し、日本をペリー艦隊が開国させた時代に戻すことをルーズベルトは決めたのだ。真綿で首を絞めるようにゆっくりと始めたのだ。大統領の持つ権力が嫌う相手に向けられたら逃げ

る術はない。一九三七のシカゴ演説では、彼一人旗を振った。

「ヨーロッパの情勢に介入すべきだ。世界の九〇%の人々の平和と自由の安全は、残り一〇%の人々によって脅かされている。アメリカだけが逃げおおせると思つてはならぬ……」

ルーズベルトは演壇を降りながら、聴衆の表情を盗み見た。彼らは無表情か退屈した顔であった。(振り向けば誰もいなかった)とルーズベルトは回顧している。

イギリス、フランスを助けた第一次大戦で一〇万人が失われた禍根が国民には深く刻まれていた。大部分が「不干渉主義」に賛成で、失業に苦しむ人々には明日のパンに関心がある。ルーズベルトはこの時孤独であった。三九歳でポリオに感染し、車椅子の使用を余儀なくされながら大統領を目指した不屈の男を、ヒットラーも日本政府も見くびっていたのだ。米国民の目を覚まし、欧州に参戦する口実として米国を攻撃させるアイデアを黙々と、しかし執拗に練り始めた時期であった。

昭和十二年二月二三日(月曜)。ワシトンの日曜は比較的静かで、グルーは仲間とゴルフを予定に入れていた。グルーは筋金入りのゴルフ好きであった。大使館から公邸に連絡が入った。電話の奥からはグルーの予定を承知

している秘書官の声であった。大使館に続く通路を歩いていると、つややかな緑の葉にいつのまにか赤いツバキの花が咲いていた。日本ほど季節を演出させる花々を持つ国はない。日本を訪れた江戸時代の外交官、軍人のいづれも花を愛でる日常が下層の人々に迎えられている文化に驚きを記している。雇っている家政婦は、言われもしないのに執務室にさり気なく生け花を活けているのだ。一呼吸して秘書室に入ると、静かな中に重い空気が充満していた。書記官や駐在武官が電報を仕分けしていて、情報責任者のユジーン・ドゥーマンが、

「電報が続々と届いています」  
といつて三通の電報を渡した。

グルーは電報に目を通すと、外相広田弘毅に面談を申し込むよう指示した。パナイ号事件の詳細を知ること、ルシタニア号撃沈事件を彷彿させた。米国は日本と国交断絶し、グルーに荷造を命じる訓令が降りるほどの危機であった。

二月一二日の朝、パナイ号は日本軍の砲弾を避けて、南京上流約二〇キロ地点に停泊していた。パナイ号は長江流域でのアメリカ商業活動を護衛する目的で、数隻の軍艦からなる揚子江警備隊を創設していた。パナイ号は全長約五八メートル、排水量四五〇トンに三インチ砲二

門、三〇ミリ機銃一〇門を備えている。脱出する外国人の他、在南京米国大使館の四名も無線施設を持つパナイ号に臨時の大使館分室を置いた。午前八時半、砲弾が艦近くに落ちるようになったため、スタンダード石油会社のタンカー三隻を伴って南京上流へと移動した。大使館員は前日に、国務長官宛てに、

「日本爆撃機が連日パナイ号上空を飛んでいる。我々の位置を日本大使館に連絡されたい」という趣旨の電文を打ったのである。グルーが受けた電報は国務省から転送されたものであった。この時点ではパナイ号の被害が出たわけではないが、被害が出れば構築した平和の望みは打ち切られるであろう。

彼はこの朝、アメリカ人の生命、財産を攻撃しないように嚴重措置を取るよう要請した文書を外相広田に手渡した。

「米国民は怒っている」

疲れた青白い顔をした広田は、

「米国の抗議を軍当局に伝えよう」といった。午後三時過ぎ、広田外相が大使館に訪問すると電話があった。その前の午後一時三五分には揚子江警備司令官からパナイ号との交信が途絶えたこと、英国砲艦クリケット号、スクラブ号は午後三回にわたって空撃され、一八発の爆弾

が落ち、一発が商船に命中したとの電報が転電されていた。アメリカの反応は素早く、一日、ルーズベルト大統領は天皇裕仁宛の抗議書をハル国務長官をとおして斎藤博駐米大使に手交させた。

広田が大使館を訪問することは、パナイ号が最悪の事態になったことを予想させた。執務室には立ったままの広田がいた。

パナイ号及びスタンダード石油会社の持ち船が、日本軍による爆弾によって沈められたと報告し、陳謝した。中国機による誤爆とか偶然の事故とかの言い逃れをせず、

「われわれがこの事件をどんなにひどく感じているか、言葉ではいえない」といった。

広田は友人が示す最大の表情、その人格が備えた心からの謝罪がにじみでていた。グルーは執務室から一階に降り、彼の自動車まで見送った。後部座席の窓から広田の顔が見えたような気がして、グルーは暗い展開を想像した。

日本軍機によるパナイ号事件の損害は、沈没艦船六隻（パナイ号、スタンダード会社船五隻）、破壊船舶二隻（スタンダード会社船二隻）と死者三名、負傷者七四名であった。

一四日朝、グルーは好物の玉子料理を残して、早々に大使館に戻った。パナイ号沈没に関する海外及び日本の報道を収集、分析が徹夜で進められていた。情報責任者ユージン・ドゥーマンが示した日本の新聞は紙面の大部分が「南京陥落」報道が占め、パナイ号沈没は解説なしの記事が小さくあるだけであった。午後、パナイ号撃沈に対するアメリカ政府の公式抗議通牒が駐米大使館に届いた。グルーは一刻も早く広田に手渡そうとしたが、閣議が長引いたため、大使館を出発したのが午後八時過ぎであった。

霞が関の外務省までは車で五分ぐらいであるが、車はおびただしい数の群衆の波に飲まれてしまった。グルーが車外を覗くと、はるか先に提灯を高く掲げた集団の後に提灯を掲げた群衆が連なっている。

「提灯行列です」日本人の運転手がいった。

祝意を表わす行事の際や祭礼の時に、火をともした提灯を手に手に持って、夜間列を組んで行進するのだという。南京陥落の真相は伏せられ、日本の勝利を行列は喜んでいいるが、中国を「膺懲」した皇軍は盗賊のように食糧を奪い、市民を殺戮していたのである。提灯の赤い灯は幾重にも続いて、口笛やきれぎれの叫び、万歳の唱和がうねりのように広がりグルーの耳を煩わした。掘端の

隅々に闇だまりができて、そこだけが黒々としている。遙か先の幹線道路も赤い灯で埋め尽くされ、灯火が闇に広がる美しさは日本の祭りを彷彿させるのである。澄んだ夜空に星々がきらめき、バンザイ！バンザイ！と唱和する声とともに揺れ動く提灯の列が皇居の周りに集まっていた。

突然、グルーの窓に学生帽を被った若者の顔があった。学生は車のステップにつかまり、「ハロー、ハロー」と笑いながら手を振った。日本の学生を身近に見た最初ではなかっただろうか。若者は楽し気であった。彼等の将来を決定付けるアメリカの通牒が窓を隔ててあるのも知らず、学生らは陽気に笑っている。戦争はガラス窓の厚さほどもで近づいている。グルーの脳裏に盲目のヘレンの言葉があった(見えるものが本当とはかぎらない。見えないものに横たわっているもう一つの現実があるのよ)。

外交官は今起きている事象にこだわり、緻密な外交文書こそ優れていると思いがちである。しかし、見えない現実とは、日本が自らの危機と壊滅の道に進もうとしていることである。空に浮かぶ幾万の赤い灯は、爆弾となって東京を炎上させる現実である。

(愚かな日本人よ、目覚めてくれ……)

グルーは祈る思いで遠ざかる灯を眺めていた。翌日の

新聞は「歓喜・火焰の流れ」（東京日日新聞・一月五日）と題して、東京市民三、四〇万人の大提灯行列を報じた。中国南京の陥落後、日本はその後の戦争政策をどうするのか、停戦・和平の道を選ぶのか、それとも戦争の継続・拡大を目指すのか。

「パナイ号事件の処置をめぐって露呈した日本の戦争指導者たちの国際認識の低さと展望の欠如、指導体制の分散と対立に由来する総体としての無責任、そして、真相を知られることなくマスメディアが煽る南京陥落大勝利に容易に熱狂していく国民」の行く先は戦争の道であった。外務省で広田に面会したグルーは、アメリカ政府の公式抗議文書を手渡した。

「アメリカとの友好は最も重要であり、私のできることはなんでもやる」と広田は決意を述べたが、グルーが期待した天皇からの回答の有無については触れなかった。外務省東亜局長石射猪太郎の日記には「米大統領から陛下への伝言につき斎藤（駐米大使）より公電あり。大臣はこれを上奏せぬつもり。御親電の奏請もその必要なしという。彼は国交を憂えず、一身の立場を憂えているのだ。こんな男が輔弼の臣だからタマラス、もう彼は済度するによしなし」と強烈に批判している。済度とは仏教用語から来ていて、済が外れ、度し難いが一般的に使わ

れている。石射の絶望が読み取れる箇所である。

日本海軍は誤爆として、パナイ号爆撃を行った第二連合航空隊の司令官を免職して召喚、米内大臣名で攻撃隊の指揮官を譴責処分して、早くも幕引きを狙った。グルーが掴む南京戦の実情は、日本陸海軍の無法な作戦命令によるものであり、中国の領土に侵略した結果として引き起こした事件である。

一月二四日、広田外相はグルー大使の外務省来訪を求め、アメリカ政府の対日抗議通牒に対する日本政府の正式回答文書を手交した。日本政府は陳謝を表明し、賠償の支払いと、中国におけるアメリカ国民の生命財産を攻撃しないことの保証を約束した。ただ、アメリカが指摘する故意爆撃に関しては、誤爆と主張した。

「私は大変嬉しい。あなたは私に素晴らしいクリスマス・プレゼントを贈ってくれた」

広田は涙を浮かべながら感謝の言葉をグルーに伝えた。しかし、グルーが期待した頃の広田はそこにはいなかった。広田こそ平和を実現できる人物と信じていたが、国際協調派の外交官は、定見を失ってしがみついているだけの凡庸な官僚に思えた。

グルーは日記に記す

「日米戦争の危機は本当の危険として存在する。（略）

パナイ号事件の決着という満足は、一時的にすぎないことを知りすぎるほど知っていた。そして、私がこの五年間に築きあげようと努力してきた日米関係の強固な楼閣も、瓦解して相互不信の瓦礫と化すであろうことも「パナイ号事件の経過から、日本政府には統制する能力がないことが露呈したのである。日本人が定める戦争の道が大きく口を開いていた。政府も軍部もマスコミも国民も見えないものを見ようとしなかったのである。

日本は満州を承認、世界から孤立したあげく破れかぶれで開戦、江戸末期の領土に落とされ、北海道も失う危機であった。歴史作家保坂正康氏は、ジョセフ・グルーの存在によって、日本は敗戦から占領のプロセスで多くの利益を受けることになった。グルーは帰国後国務次官に選ばれた。もし、グルーではなく、他の外交官が国務省の要職に就いていたら、日本はとり返しのつかない不利益を被ることになっただろうと。

グルーは日本の文化と日本人を解説して、天皇は日本人に不可欠であり、天皇こそ日本統治に有効であると説き回った人であった。日本の戦犯を裁く極東軍事裁判に広田の無実を主張したが、グルーの陳述は採用されなかった。広田弘毅は昭和二三年一月二三日、巢鴨拘置所において絞首刑が執行された。

#### 参考文献

- 広田弘毅・中公新書 服部龍二  
滞在日十年・ちくま学芸文庫  
ジョセフ・C・グルー  
パナイ号事件の真相・青木書店 笠原一九司  
ルシタニア号撃沈事件  
第一次世界大戦にアメリカが参戦することになったきっかけのひとつである。

## 交錯の債務履行

木原 佐瀬 智

(一) 薄紫の君

「うん！やはり今日も来ているぞ」

稲森一は声にならない眩きをもらした。今やそれは何度も見慣れているテレビ画面を確認する定番の儀式となっていた。

その日、稲森はさらに驚愕の声を発しテレビの前に釘付けとなった。

「二等。何故そこにいるんだ！」

稲森は、少年時代から大の大相撲ファンであった。相撲中継は、NHKが翌日の早朝に二十五分程でコンパクトに編集したものを録画して見るようになった。それは録画備え付きのテレビを購入した数年程前からである。茶の間にどんと陣取り夕方四時から見ていると、妻の視線が気になるのだ。本当はBSで、もっと前の十両以下の取り組みも見たいのであるが、さすがに控えている。現役時代は土日だったからまだしも、毎日となると夕方方の妻の忙しそうな振る舞いに、つい遠慮してしまうのである。

「朝ドラをゆっくり見る暇もないわ」と妻が嘆いたのを機に、食後のコーヒーを喫しながら録画した朝ドラを見る習慣になって久しい。

それにプラス、録画した大相撲を加えるようにしたのである。大相撲の中継のある奇数月の十五日間、稲森は朝刊のスポーツ欄は見ないようにしている。結果が分かっってしまうと興味が失せるからだ。嬉しいことに妻も幾分興味が増し、食器を片付けながらも特徴のある力士名を覚え楽しむようになった。

いつだったか春風亭昇太が、

「録画している野球を見るのが楽しみなんですよね。高座が終わりタクシーに乗って帰る時に話題にするといけないので、『今日の野球の試合は録画してあるので結果を言わないで下さいよ、運転手さん』と言った直後に、『分かりましたよ、お客さん。今日のジャイアンツは良いところなかったですからね』と、ざっとこんな内容で笑わせて本題に入ったのを覚えている。その気持ち痛い程よく分かる。WBCや大谷のホームランは別にして、結果の分かったスポーツ中継の録画を見る程つまらないものはない。

数年前である。相撲中継を見ている時、画面に目が留まった。今までに相撲界に存在しないような気の毒な程

の小兵力士「炎鵬」が、超大きな力士を下手投げで見事に負かした時だ。肌が白く筋肉質でもなく、優しく穏やかに見える。二枚目で意表をつくような立ち合いもしない。超小さいだけに勝った時は、万雷の拍手が館内に響く。

その興奮した観客の一人に、美しい婦人が画面に映ったのである。全身限りなく白に近い、薄い紫の洋服に身を包んだ婦人がマスク越しに大喜びし、興奮した様子で拍手を送っている。マスクまでもが薄紫に統一されている。マスク…というところ、コロナが始まった四年位前からであろうか。

稲森はいつからともなく「薄紫の君」と、その婦人を中心と呼び、今日も来ていることを確認して相撲を見ることにしている。薄紫の君は、初場所、大阪場所、夏場所、名古屋場所、秋場所、九州場所と年六場所、毎日ではないが殆どに渡って来ている。しかも溜席での観戦である。相撲関係者の維持員（相撲協会に一定額の寄付をしている）なのであろうと稲森は推測した。その炎鵬が頸椎のケガに泣き、名古屋場所の番付は幕下まで急降下している。相撲人生の危機に陥っているようだ。

WBCでの大谷の活躍もあって、メジャー初の日本人ホームラン王誕生の期待に沸きかえっている。それでも、大相撲は大関取りの豊昇龍が北勝富士との優勝決定戦を

制して初優勝を果たし盛り上がった。

薄紫の君が大喜びで拍手している時である。後ろから男がやって来た。男も拍手を送り、二人で喜びを分かち合っているのが分かった。偶然であろうがアップされた男の顔が映った。マスク着用が任意になって久しいが、薄紫の君の横で意図的にも見えるようにマスクをゆつくりと外した。額、唇の真横にあたる左右の頬に、ハッキリと分かる大きな黒子が三つ形成されている。額の黒子の頂点から降ろされた二辺は左右の目の中間を通り、唇の真横の黒子に達している。稲森は男の顔に興奮した。間違いない。黒子の三点を結ぶと二等辺三角形になる。渾名が二等辺三角形、略して二等。白髪となり年齢を重ねても、確かに二等だ。

「まさか二等が…どうして…」

偶然の邂逅、いや、これは一方的な稲森だけの邂逅であった。心の隅にいつも苛まれている卒業できた詫びも述べずに別れ、気が付けば半世紀の時を刻んだのだ。大学時代の友人にこうした経緯で見かけるとは…。人生も第三コーナーに差ししかかっている。長い間気にしてきた債務を綺麗に履行すべき機会が訪れたのだと、稲森は悟った。

(二) 未来永劫の秘密

「大盛一番、相撲ばかり見ていないでそろそろ卒論をまとめないと本当に卒業できないぞ」

「二等、秋場所の小母さん毎日来ているよ。輪島のファインで金持ちなんだろうな」

今日も稲森一は、二等こと宮東信也のアパートに寄り相撲中継に夢中だ。自分の部屋にはテレビがないのだ。気心の知れた友人の部屋で寛ぎ無駄口を叩きながら、相撲中継時には二等の所に来て喰い入ってみているのだ。

中継が始まったのは昭和二十八年、稲森が誕生した二年後の年である。テレビはこの家庭にでもある代物ではなかった。稲森は、小学校低学年の頃からラジオ店でテレビ中継を見ながら決まり手の分かる勝敗をメモし、祖父に報告するのが日課になったのである。稲森の相撲好きの原点はそこから来ているのだ。

「輪島は相撲の常識を超えて強いよ。優勝決まりだな。上手より下手投げが強いなんて」と、興奮したように言いつつテーブルの上の原稿用紙の束をパラパラとめくった。「二等、これ卒論か？」

「ああ、思いつくままに原稿用紙を埋めたんだけど、論文になっていない気がするよ。今書き上げているのを提

出することにしたよ。大盛一番も本ばかり読んでいないで本腰を入れるんだな」と、説教的な言い方をしたが、宮東は稲森が相撲観戦もさることながら大の読書の虫であることを知っていたのである。

「二等、この原稿無駄にするなら俺に出来ないか。俺が書き写すから筆跡はばれないよ」

とんでもないことを言い出した稲森に、宮東は心が揺れた。間もなく仕上がる卒論は、自分でも上出来だと評価していた。一方で、せっかく書いた百枚程の原稿が評価もされず消えてしまうのも惜しいと思った。それは、稲森一名とか宮東信也名とかに拘らず、その分野で一流と知られる仲鉢晋教授がどのような評価を下してくれるか興味を湧いたからである。

「大盛一番、これは俺とお前の約束だぞ。未来永劫秘密だ。それを守るならやつても良い」

「二等、そんなに深刻に考えなくてもいいよ。三十名もいるんだ。提出さえすれば仲鉢教授は、ろくすっぽ読みもしないで単位をくれるよ。俺は卒業できれば良いんだよ。ラッキーにも、二等も俺も希望した所に就職が決まったしな。第一、俺は無駄な能力を発揮したくない。四月から俺は嫌でも文字と向かい合い、それこそ書いて喰ってゆくんだ」と豪語し笑った。

稲森が無茶苦茶とも言える言動を取りながらも、半端でない強固な意志の持ち主であることを宮東は知っている。宮東は、我ながら良い渾名を付けたものだと思うている。

稲森の食欲は驚く程旺盛である。母親と同年齢位の学食の小母さんが、気持ち良く大盛りに盛ったどんぶり飯をテーブルに置いてくれる。さらにお代わりの大盛も存分にサーブしてくれるのだ。後から来た稲森が宮東の前に来て定食を注文した。静かに食べていた宮東は度肝を抜かれた。大きな身体でもなく太つてもいない。学食名物男となった。稲森一の名に似せて、当時宣伝で流行り出した札幌一番に因んで大盛一番と命名した。瞬く間に広がり、「大盛一番」と親しみを込めて誰もが呼ぶようになった。出会いは学食の食堂だった。

同じ学部でありながらも、教授陣の講義を共にすることがそんなに多くなかった。そもそも、単位を取得できる最低条件を満たせば良いと割り切っていたのである。授業時数の確保、論文の提出、テスト等は怠らず、講義を受けない割には成績は優秀であったのだ。

「大盛一番、たまには外に出て食事しないか」と、宮東が誘った。学食なら良いが他では食べない、というつれない返事であった。

気の合う仲間となったが、学食以外の所で食事したり喫茶店に入ったりしたことは一度もなかったのである。宮東がその理由を知ることになったのは間もなくであった。しかも意外な人物からである。

「大盛一番君、嫌々失礼、稲森一君、やっぱりここにいたね。君の居場所はだ抵ここだね」

「仲鉢先生、申し訳ありません。先生の講義も受けずに」と言いつつ原稿を本の下に素早く隠したが、仲鉢教授は見逃さなかった。

「図書館での読書や調べ物は、僕の講義を受けるよりもずっと君の能力を生かしてくれるからね。ま、気にしないで。それよりその原稿、僕に読ませてくれないかな」と言いつつ、既に仲鉢教授は稲森の原稿を手に入っていた。

「先生、卒論はもう提出してありますので」

「あと四、五人で終わるよ。君のももちろん読んだよ。なかなかの出来だったよ」

仲鉢教授は稲森の了解を得ず、原稿を持って図書館を後にした。稲森はまずいと思った。就職も決まっているのだ。何せあの論文は、教授の著述を真つ向から具体的な論法で否定して仕上げたものなのだ。来週にでも教授室を訪問し、土下座して謝罪し、単位を頂き卒業を懇願

するしかないな、と考えた。

宮東らと昼食をたらふく食べた稲森は、再び図書館に戻った。午後の講義はもう受講しなくても単位は取れると判断している。

「大盛一番、また来週な」「うん、二等」と、受講と図書館に分かれ稲森は読書に没頭した。

稲森は時計を見た。四時。バイトまで一時間もある。仲鉢教授の所へ行こう、と決断した。……決断するまでもなかった。図書館に教授が再びやって来たのだ。

「大盛一番君、預かった論文良かったよ」と、今度はいつもの「嫌々失礼、稲森一君」とは訂正しなかった。

「趣向を変えたのかね。卒論とは違う全く視点の変えた論文に君の存在を知る想いだよ。それとは別に、来週月曜日の僕の講義はぜひとも聴いてくれないかな。卒論の成績も発表したいと思うしね」と、仲鉢教授は卒論とは別の先程の論文を机上に置き、笑顔を見せながら立ち去った。稲森は冷や汗をかいた。

「二等君、嫌々失礼、顔の黒子を気にしていたら言わないよ。もうすぐ卒業だしね。四月から郷里の中学校の社会科教師になるんだってね。おめでとう。頑張つて。君は良い教師になると思うよ」と、まさか仲鉢教授が図書館から戻った直後に宮東と話し込んでいるとは、稲森は

夢にも思っていないだろう。

学者ながら、担当した学生の個々を思いやる仲鉢教授は珍しい存在であった。大盛飯をたらふく食べる理由を教えてくれたのは、他ならぬ仲鉢教授であったのだ。

「大盛飯に執着する理由は知っているかね。彼は生活が大変なんだ。バイト生活だ。体力温存のためなんだ。一日一食なんだ。たまに二食の時もあるがね。ご馳走になる時は何杯でも食べる。ま、大盛飯は生活と読書のためだ。僕の著書も購入せず何回も図書館で読み、そして調べ……ま、そういうことだ」

話しながら公立学校の生徒には大学以上に訳ありの生徒が多くいる。気配りができ、どのような生徒も好きになれる教師になつてもらいたい旨を告げられた。宮東は胸が熱くなつた。卒業まで残り講義数が少なくなつたが、明日の講義が今から楽しみになった。

翌日の講義は、卒論提出者だけでなく他の学生もいつも以上に多かつた。卒論の成績を公表することを知って、他のゼミの学生の興味関心を惹いたからである。

「詳細に個々の成績は公表しません」：学生等は神妙に静かに次の言葉を待っている。

「要は全員『良』以上です。就職も決まっていますしよ。うから。僕は就職の邪魔をしたくありませんからね」：

一拍おいて学生等の笑い声が起こり和やかになった。

「優秀者一名、最優秀者一名、準優秀者八名のみ発表します。皆さんの論文、全員に直接僕の言葉を書かせて頂きました。友に見せるもよし、自分だけ見るもよし、要はご自由に。卒業後の活躍を祈っています」と言いながら、準優秀者、優秀者、最優秀者の順で発表となった。学生等は教授の声を静かに待った。

「準優秀者、宮坂進君、角山徹君……」と続き「優秀者は、宮東信也君!」「おめでとう」「おう!」「凄い」等の声が宮東に向けられ、万雷の拍手が起こった。さらに最優秀者の発表を聞き、異常なざわめきが起こった。「最優秀者、大盛……、嫌、稲森一君!」講義に出席することの少ない稲森が何故に最優秀者なのか、疑問を抱くざわめきの声であった。

「あくまで論文で評価させていただきました。これから社会で活躍する皆さんです。論文に記した僕の正直な言葉が、旅立ちへのささやかな糧にして頂ければ嬉しいです。僕も感謝です」と結んだ。

清々しい想いで宮東は教授の言葉を聞いた。昨日わざわざ仲鉢教授が宮東の所へ赴き、詳細に説明してくれたのである。教授の温かさが分かり胸を熱くした。

「前もって特別に二等君、嫌々失礼、宮東信也君だけに言

っておきます。君の卒論、良いタッチで論じられており

素晴らしかったですね。最優秀の大盛一番君の論文もね。甲乙を付けがたい」と、仲鉢晋教授は神妙に話し始めた。「因みにこれ大盛一番君、嫌々失礼、稲森君の正式な卒論ではないが、任意に私の著書について論じ書き上げたものです。コピーしたので二等君もぜひ読んでください。嫌々、僕自身頗る納得する論文になっているのです。反省するのは僕です。多くの学生は僕の著書を何冊か購入し卒論ぶって賞賛し書いていますが、稲森君は違う。僕の著書など何一つ買っていない。図書館で彼の言葉を借りるなら僕の本を漁り、読み、論じています」と言いながら、宮東にコピーした原稿を手渡ししてくれた。

「言う、言わないは宮東君の自由ですよ。教師としての活躍を祈っています。ところで、彼にも話しましたが明日の僕の講義、もちろん君は受講するだろうが、君からも大盛一番君にぜひ受講するように伝えてください」

卒論についての否は一言も言わず、仲鉢教授の温かい気持ちに感動した。仲鉢教授から真の教師像を示された気がしたのである。なぜか四月の赴任が楽しみになってきた。

手渡された論文に一人一人が喰い入るように教授の手書きの評価を読んだ……。

略……。論文が見事な構成をなし申し分ありません。残念なことに、私の著述を全面的に賞賛しております。宮東君の意見、考えも必要かと感じました。四月からは学術的な本等を読む暇もなくなります。しかし、多忙な日々の中にも私の講義（笑）を時には思い出して、教師力のアップに繋ぐことができれば嬉しいです。友だちを思うように、（親友は大盛一番君？）どのような個性の持ち主の生徒でも好きになるような教師になってください。宮東君ならできます。活躍を祈っています。――

略……。論文の組み立てには納得できません。しかし、結論の予想が理解できるところに稲森君の弱さが見られます。余談ですが、先日図書館で借りた論文は、私の著書に直接的に意見を述べています。鋭い指摘には私自身一考しなければならぬと正直素直に思いました。

大手の出版業界では、今回の付度するような卒論ではたちまち叩かれてしまいますよ。むしろ図書館で借りた論文に（笑）期待します。稲森君の文面が業界で見られれば本望です。きつと活躍できると信じています。――

稲森から手渡された論文への教授の寸評を読み、宮東は全てを悟った。教授は知っていたのだ。そう思った。二つの論文をどう評価してくれるのか……楽しみだとは独りよがりの自惚れであったのだ。しかも友としての大盛

一番と自分との関係、実力をも把握した上でのことであった。状況を知らない稲森は、

「論文二つ、二等が書いたものだとは言えないから……。それにしても二等、凄いよ」

「大盛一番、もう忘れよう。仲鉢教授に感謝だ。元気でな。また会おう」

宮東は逡巡したが、真実を言えなかった。

二人の門出を祝うように、キャンパスには早めの桜が青空に映えていた。満面の笑顔で手を振った。今生の別れになるなどとは考えてもいない。「大盛一番」「二等」と互いに呼び合い、またいつものように近々に会えるものと思っていた。本当にそんな気がしたのだ。

時の流れが無情に過ぎ去るものとは予想もしていない。半世紀もの時の流れを経るとは、稲森も宮東も考えていなかったのである。

### (三) カメラの向こうに

「春江、名古屋場所の千秋楽なんだが、溜席でなく桝席何とかならないかな。できれば春江の溜席から近いところをお願いしたいんだが。料金はちゃんと払うよ」

「伯父さん、OKよ」

宮東はその理由を話した。とにかく相撲好きで、観戦しながら土俵周辺の特徴のある人物を把握することに長けている。美しい洋服の似合う春江は最たるものだ。今もその習慣が続いているはずだ。春江は伯父の青春に触れた嬉しさに酔った。真面目な中学校の教師の源を呼び起こした気がしたからである。

宮東はテレビ放映されているであろうカメラを意識しながら、そうっと春江に近づいた。

「大盛一番、見ているか！」豊昇龍が優勝決定戦で北勝富士を制して初優勝。宮東は春江の横でマスクをゆっくり外した。拍手を送りながら姪の春江も夢中で手を叩いている。維持員の夫の関係から相撲通になった春江は、伯父の宮東信也にもそれなら溜席にと誘ったのであるが遠慮した。遠慮というよりは、美しい春江に近寄る効果の方が稲森を惹きつけると思ったのだ。興奮する姿をカメラに捉えられることを祈った。きつと稲森はどこかでテレビを見ている、と確信した。半世紀も経た七十歳代の坂を歩き始めた（健在であれば）二人の邂逅が成せると信じた。

「大盛一番、よくも俺にピッタリの良い渾名を付けてくれたものだ」と、館内の興奮に誘われ宮東の胸は異質な熱狂に酔っていた。

考えてみると、昔から宮東は二等が多かった。中学の成績でも頑張ったが二番が最高。体育時の運動神経も程々ながら、短距離走・中距離走も二番が最高。絵を描けば佳作。俳句、川柳、短歌にも挑戦したが次点。稲森に付けられた正式名渾名二等辺三角形でさえフルネームで呼ばれることなく略して、正に似合いの「二等」だ。一方、稲森の渾名はいつもフルネームの「大盛一番」で呼ばれていた。

もしも、本当に再会を果たしたなら、卒論の最優秀者は「大盛一番」こと稲森一だったんだと告げ、債務の履行を果たそうと決意した。

「大盛一番、俺の黒子が見えるか！白髪になっても二等辺三角形の黒子は今も健在だぞ！」

宮東は、春江とは異なる興奮の拍手を送った。カメラの向こうにいるであろう稲森に、

「大盛一番分かるか。二等の俺だ。必ず連絡するからな。待ってろよ」と、大声で叫んだ。

## 男の一生「父の自分史」(つづき)

寺崎 今出屋謙吉

### 三、斜陽の巻

敗戦後の昭和二十一年(一九四六)年五月、大切な父が中風を患い、一か月余りの後に無常の風に誘われ、四歳の孫の手を握って「孫よ、お別れだ」と一声残して、苦しむこともなく七十二歳で極楽浄土へ旅立った。父は生まれて間もない二歳の頃、生みの母に見捨てられたことから、点々と住所も変わり、苦しみにも苦しみを抜いたにも拘わらず、根っここの心情が善人であったようである。成長してからは自分が困っても他人の世話にもならず、一方、仲間の面倒はよく見て潔白を主眼に生き抜き、最後の二十年間は、倅の謙吉(著者)の開運を見つつ天国に大往生したので、仏心に適ったことであろうと思ったものである。

だが、父が死んだことや預金封鎖などがきっかけで自分の気持ちに微妙な不安感が起こったことから、成東中学二年であった長男に自分の仕事である竹籠作りを習わせようと中学を中退させてしまった。長男は、籠作りを習ったり、田畑を耕したりを始めたが、亡くなった祖父に似て仕事も耕作も器用であった。

そのような頃、マッカーサーの命令で農地改革が始まった。農地改革の背景は、それまでの日本では農地を所有しながら自らは耕作をしない地主と、土地を借りる代わりに農作物の大半を地主に納める小作農という関係において大きな権力を持っていた地主層に打撃を与えて、日本に社会的・経済的变化をもたらす必要があるとマッカーサーが考えたからであった。

この時、疎開してきていた自分と同じ地区生まれの海老根さんという人と、ふとしたことから知り合いになった。海老根さんは、社会党の浅沼稻次郎と同志だったとのことであった。そういう海老根さんであったからだと思うが、小作人を助ける農民組合を作る運動をしていた。自分の土地は自分で購入したから小作人ではなかったが、自分の親類はみんな地主層であった。でも、自分は生来の熱血肌であったので、農民組合設立運動に協力するため農民組合に入るようになった。

海老根さんは疎開してきた人でこの地区に知り合いがなく、なかなか組合の設立が進まなかったが、この地区住民の自分が運動に参加することによってたちまち組合を設立することが出来てしまった。政治に無関心であった自分に血がたぎってきてしまい、小作人の味方になり、村会議員選挙に金を使わずに当選してしまった。その時、

四十二歳。しかし、当時、村会議員は名誉職のようなもので一銭の収入もない。自分の商売である養蚕籠作りは駄目になったが、浜の漁業で獲れた鯛を入れるヤッサ籠が売れそうだったのでそれを細々と作っていた。

ところが、子供達が次第に大きくなってきて教育に金がかかってきた。にも拘わらず、PTA会長に選ばれてしまい商売である竹籠作りにも支障が出てきたが、よくできた倅で、なんでもやってくれるので助かった。

さて、議員は四年で辞めたが、最早五十歳前後でいわゆる町村の世話役世代となり、土地改良理事、両総用水総代工事委員長、農協理事、種豚組合長などの役職が次々と降りかかっていた。どれもこれも一銭にもならない仕事ばかり。でも、根が金を欲しがってやるような性格ではないから、一升の酒も人に飲ませるような余裕もない。子供らみんな苦勞しながら大学へ通っている。親がいい気になって役員の二次会・三次会をやるようでは子供に示しがつかない。苦しかったが町のこと、村のことをよくもやりお世話したものである。妻の苦しみも協力も感謝の気持ちでいっぱいである。

最も苦勞を掛けたのは長男である。旧制中学を中退させ、農業も竹籠作りもやってくれたが、昭和二十五年頃から籠作りでは商売ができなくなった。そこで、千葉の

川鉄の土方にいった。米の検査員も二年ほどやった。土地改良の事務も二年程やってくれた。学歴はないが、なんでも普通以上にやっけてのける。根が素直な性格だから人にも愛される。親の自分も随分と助かり、何とか町や村の役員をやり通すことができた。川鉄に土方仕事を一、二年行っていた時に川鉄の就職試験を受け受かってしまった。半年くらいは新入社員研修があるから通勤はできないという条件だった。妻は、それでは農業が出来なくなるので困ると言い出した。仕方なく、川鉄は断ることになった。しかし、七反歩ばかりの農業では暮らせない。そこで、叔父の世話で稲毛の丸山農機具工場に就職した。給料は安い。

そのような中、自分と妻は農業をやりながら年に二か月くらいは竹籠を作った。町や村の役員業務も何とかやった。倅も日曜には手伝ってくれた。

昭和三十九年、土地改良の交換分合の調整を頼まれ、六町歩余りを纏めた。その際に、交換分合を纏めるために一反歩当たりの単価として畑十五万円、田二十万円として、自分の土地の田一反歩、畑一反歩を五、六人に売ってしまった。そのような土地が今では道路付きなら田畑とも二百万円、三百万円、道路付きでなくとも百万円という。相場の時代の推移は計り知れない。思えばもっ

たいないような気もするが、田畑があればリヤカーで妻も働かなければならない。耕運機を買うほどの農家ではない。家族相談で売ったので悔いはない。

現在、田三反歩、本家の甥に米十俵の年貢で作ってもらっている。畑は自宅近くの一反歩を妻の野菜作り。日曜に俵の手伝いで悠々たる老後の楽しみというところか。自分は六十歳からは一切の役職をやらす、孫相手に悠々たる日常である。

他人の子供の媒酌などに楽しみを求め、二十組近く媒酌した。今後、父の大往生を手本に余生を送ろうと考えている。

追記（四男記す）

父 平成十五年九月六日 九十四歳

母 平成二十八年三月九日 百三歳